THEATRE & POLICY

シアター＆ポリシー　通巻４９号　２００８年６月２０日発行

応用ドラマ・プロジェクト

私たちの街の物語
異文化理解とシティズンシップ

2008年7月28日〜8月4日、少しばかりユニークなコミュニティ・シアターのプロジェクトが広島県三原市が展開されます。

ロンドン大学でコミュニティ・シアターを学ぶ学生たちと、アートマネジメントを学ぶ日本の学生たちが、それぞれ演出家と通訳コーディネーターとしてチームを組んで、パフォーマーとしての広島県三原市の三原キッズステーションに集う小学生・中学生たちとともにプロムナード型のパフォーマンスを創造に挑みます。テーマは、「環境」と「市民としての責任（シティズンシップ）」。

子どもたちは、「環境」と「市民としての責任」というテーマを少しばかり異なる状況のなかで教条的にではなく、自分たちの想像性を駆使して体験的にクリエイティブに学び、芸術創造へと展開していきます。異なる文化と言葉をもった日英の青年たちとの協働から子どもたち一人ひとりが獲得するのは、多様なコミュニケーションや表現。そして、それぞれの文化の差異を考え、理解するチカラ。

英国でコミュニティ・シアターを学ぶ学生たちは、異なる言葉と文化・社会背景を持つ子どもたちやスタッフとチームを形成しながらいかに子どもたちの健全育成と芸術性を共生させていくのかを学びます。

一方、日本の将来のアートマネジメントを担う人材は、重層的な国際的なコミュニティ・アートのプロジェクトに携わる過程で、創造やプロジェクトにかかる英語力の向上とともに、アーティストの意図、参加する子どもたちの一人一人の資質、思い、そして体調、ボランティアスタッフなどへの配慮といった実際のマネジメントならびにコーディネーション能力を培います。

三原キッズステーションの昨年の公演「はっぴいさん」より

演劇という様々な次元の目的を包括的に重層的にとりこめる形態のなかでも、「プロムナード」というユニークな創造・上演手法を採用するのは、子どもたちの創造性を劇場という額縁の中に閉じ込めてしまわないためであり、一人ひとりの想像力をひきだすために不可欠な双方向性を持つものだからです。一人の演出家が大勢を人形のようにコントロールし、振付けてしまうのではなく、少人数のグループと若い指導者たちとのコミュニケーションから生まれるきめ細やかな創造をそのまま表現できる形態だと考えています。

皆様にお披露目するパフォーマンスは、8月3日（日）。三原市本郷生涯学習センターで繰り広げられます。さまざまな次元の、さまざまな目的が織り成す、少しばかり野心的なコミュニティ・プロジェクトの参加者たちをご紹介します。

特定非営利活動法人
シアタープランニングネットワーク
〒182-0003
東京都調布市若葉町1-33-43-202
TEL(03)5384-8715
FAX(03)5384-8715
tpn1@msb.biglobe.ne.jp
http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn

助成：
JAPANFOUNDATION 国際交流基金
キリン福祉財団 The KIRIN Foundation
The Great Britain SASAKAWA FOUNDATION グレイトブリテン・ササカワ財団

応用ドラマ・プロジェクト
私たちの街の物語-異文化理解とシティズンシップ

ヘレン・ニコルソン(右)と中山夏織

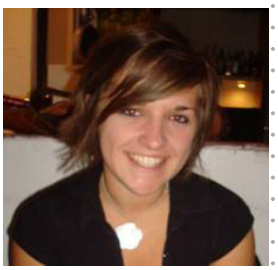
Particpants

ＵＫチーム

総合演出を担当するヘレン・ニコルソン(Dr Helen Nicholson)です。このプロジェクトに参加するために、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ・カレッジから三人の学生たちを選抜しました。三人ともちょうど卒業を迎え、コミュニティ・シアターや芸術教育のキャリアにいま歩みだそうとしています。フェリシティ・ミンシャル、リズ・ベメント、そしてアシュリン・マックギー。自分たちの言葉で紹介させていただきたいと思います。

フェリシティ・ミンシャル

私の名前は、**フェリシティ・ミンシャル**(Felicity Minshall)です。舞台芸術にとても関心があり、研鑽を続けてきました。15年にわたりピアニストとフルート奏者としてのトレーニングを受け、多くのお芝居、ミュージカル、コンサートで演奏してきました。最も光栄だったのは、シドニー・オペラ・ハウスでの演奏です。ダウンジーの交響楽団とウィンド・アンサンブルの主席フルート奏者も務めています。いまフルート演奏での修了資格の取得に向けてがんばっています。


リズ・ベメント

ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイでは、ドラマと音楽を専攻し、数多くのパフォーマンスに出演するだけでなく、音楽監督や特殊効果スタッフとしても参加しました。また、ドラマ実践家として、数多くの芸術を基盤としたボランティア・プロジェクトへの参加、コミュニティのなかに自分を溶け込ませてきました。老人ホームにも通い、音楽を演奏し、ドラマを活用することでコミュニティにかかわり、健全な関係性を築くことに多大な喜びを感じてきました。大学では、子どもたちのためのドラマ・ワークショップを担い、環境とシティズンシップをテーマとしたパフォーマンスに向けて活動しました。これはドラマと音楽を媒体とした身体的学習に焦点をおいたものであり、さらには社会的、倫理的、かつ文化的な問題を子どもたちに教えることを目的としたものでした。私の関心は、教育における音楽とドラマとのあいだの関係性、その子どもたちの生きる力の発展への影響です。

アシュリン・マックギー

ドラマとともに音楽を学び、二つの科目がお互いに補足しあうのを感じています。この知識が応用ドラマ・プロジェクトに利用できればと思います。音楽家として育てられた、私の音楽のスキルを、大切な社会的スキルや他の文化についての知識を教える機会に役立てたいと望んでいます。さらには、このプロジェクトが未来の教師としての私に価値のある経験をもたらしてくれるに違いありません。

このプロジェクトを通して、文化を横断する相互的な関係性を築けることを望んでいます。この経験が私の目を私たちが今日生きる世界に開くことになるでしょう。ドラマ・ファシリテーターとして音楽家としての私のスキルを通して、より大きなコミュニティ、他の文化に積極的な貢献を果たしたいと考えています。

リズ・ベメント(Elizabeth Bemment)です。ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイのドラマとシアターの学士号をいただき、卒業したばかりです。大学での三年間、子どもたちの演劇や子どもたちと一緒に活動することへの私のパッションは変わることなく大きくなってきました。

この夏、日本の三原へ旅し、子どもたちの演劇づくりに参加できる機会が与えられたことをほんとうに光栄に感じています。

９月から私はドラマ教師になるためのトレーニングを始めます。私が中学校のドラマ教師になりたい理由は、ドラマが子どもたちにポジティブな影響をもたらすのを見てきたからです。また、子どもたちが演劇を通して体験する創造的なプロセスを奨励することで、将来的にこの関心をさらに高めていきたいと望んでいるからです。この応用ドラマ・プロジェクトが私にこのような機会を与えてくれるのではないかとてもエキサイティングな気分です。このプロジェクトが意味するのは、異なる文化を体験する機会を得るということ、またいかにドラマが日本で用いられ、価値づけられているかを学ぶということです。これは新しい事象に対して私が心をより開けるようにしてくれるでしょう。また、すべて異なる背景と文化を持つ子どもたちと一緒に活動する多くの経験が、私をいい教師にしてくれるのではないかと感じています。

もっと重要なのは、子どもたちと私たちがチームを組み、ドラマ作品を創造し、子どもたちの祝祭のすべてを楽しむことです。子どもたち

や大人たちとドラマを一緒にやってきた経験は、もしプロセスに何か楽しみを見出せたら、それが演劇を見るにもより楽しみうるものにし、子どもたちはすべての体験をポジティブに眺めるようになると教えました。それだけが大人になる子どもたちの成長にいい影響をもたらすものだからです。私は子どもたちともに、一つの優れたドラマ作品を創造するために、さまざまな演劇のテクニックを探求し、試すのを楽しみにしています。とてもエキサイティングな旅を経験するために７月、飛行機に乗り込むのが楽しみです。

舟川　絢子

私の名前は**アシュリン・マックギー**（Ashling McGee）です。21歳で、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイのドラマ課程を修了したばかりです。学んできたなかで最も大好きだったのは、子どもたち、そしてコミュニティともに活動を行ったことです。学習と創造性はドラマを通して、楽しいあり方で豊かなものになると信じています。私はニューヨークで生まれ、ロンドンの中心部で育ちました。ロンドンは多くのものがあふれる巨大な街ですが、とりわけ私が愛するのは芝居や映画を鑑賞する、踊りに行く、子どもたちと一緒に活動することです。私の大好きなことの一つは、新しいものや興味深い人々と出会い、学び、そしてとりわけ、一緒に笑うことです。私は日本を訪ねたことはありません。このようなエキサイティングな経験が始まるのが待ちきれない思いです。

並河　咲耶

私はいつも笑っていることが大好きです。ドラマの世界は数多くの機会をもっていると考えています。誰もが持つ想像力に制限などないからです。皆さんにお目にかかり、一緒に活動するのが楽しみです。

神野　裕史

ＪＰチーム

通訳兼アートマネジャーの指導とともに、プロジェクト全体の運営を担当する**中山夏織**（Kaori Nakayama）です。日本チームのメンバーを簡単にご紹介したいと思います。

舟川絢子（Ayako Funakawa）は、慶應義塾大学卒業後、この春、東京藝術大学大学院音楽研究科に入学し、アートマネジメントと文化政策を学んでいます。昨年のあうるすぽっとアートマネジメント研修生として劇場開場という怒涛の7ヶ月間を経験、また今年はキジムナー・フェスタの通訳＆コレスポンダンスチームの一員として芸術現場のなかに飛び込んでいます。舟川絢子の関心はコーディネートとコミュニティ。

「異文化の人々、様々な立場の人が集まってひとつの作品をつくりあげるプロセスで、コーディネーターは何をし、何をせず、何に留意しなければならないのかを体験したいと思っています。」

新谷　晴香

アメリカから参加してくれるのは、**並河咲耶**（Saya Namikawa）です。マサチューセッツ・アムハースト大学で、打楽器、音楽理論などを学び、この冬に卒業。行動的な音楽家で様々な国の様々なフェスティバルにスタッフとして、アーティストとして参加してきました。今年のキジムナー・フェスタにも通訳として参加します。並河咲耶が求めるのは、コミュニケーション。

「人、そしてその人々との触れ合い、コミュニケーションがテーマ。いつか自分が「いる」という存在そのものがコミュニケーションになりうるような自分になれるように前進していきたいと思っています。」

このプロジェクトで、光栄なる（？）唯一の男性参加者となるのが、**神野裕史**（Hirofumi Jinno）です。現在、東京大学教養学部超域文化科4年に在学中。交換留学でパリ政治学院に留学した経験も。向上心の強い努力家のようで、英語、フランス語のみならず、現在はスペイン語にも挑戦中。神野裕史が望むのは、「子どもたちの成長を応援することで、自らも成長する」ということ。

「この体験を土台にして経験をつみ、将来、文化交流イベントを企画・運営し、文化の異なる人々に対する関心や理解を促進したいと考えています。そうすることで世界の平和と友好を生みだす営みに連なれればとと思っています」。

準インターン生として、三原から参加するのは神戸大学国際文化学部で異文化交流とアートマネジメントなどを学ぶ**新谷晴香**（Haruka Shintani）です。彼女の熱意が、私に「準インターン生」の枠組みを作らせました。現在、若干19歳の2年生です。

「子どもの視点から見た異文化交流、そして姿を見ることによって、自分自身の「異文化交流とは」という勉強につなげていきたいと思います。私が18年間住んできた町でこの経験ができることを聞き、ぜひその手伝いをしたいと思っています。」

以上が、現在確定している精鋭部隊です。もちろんそれなりの語学力は不可欠ですが、いま何ができるのかよりは、この経験が将来にいかせるのではないか、またチームとしてのバランスを考慮した選抜です。そのために同じ専門をもつ方の参加を断念せざるを得ませんでした。

他にも若干名の準インターン生の参加を予定しています。陰になり日向になりながら、通訳兼アートマネジャーたちの作業量は、英国チームの2倍以上に膨れ上がるだろうと予想されるからです。国際プロジェクトにおけるアートマネジメントの現実ですが、その膨大な作業量を、チームで助け合いながら、創造的にこなしていくなかから、かけがえのないものを勝ち取ってくれるものと期待しています。

アンディ先生のドラマ・レシピ

ドラマ・イン・エデュケーション2008

アンディ・ケンプ

ドラマを作るプロセスは、料理ほど神秘的なものではありません。しかし、なぜある種の魔法を伴っているように見えるのかはわかりやすいことです。というのは、食事の準備をするにも、ドラマの準備をするにも、多くの材料から何かを選ぶ必要があるからです。それから、正しい順番で、きちんと量を調節して、それらを混ぜあわせていく。ときには、調理しないで出したほうがよかったり、一晩寝かせたほうがいい味が出たり、色々です。私にとって、料理もドラマも、人間の経験を豊かにする芸術的なものであり、また同様に、健康的な暮らしに欠かせないものであるように思われるのです。両者に共通して言えることは、十分に手をかけないとおいしくないということ！

今年の８月に初めて日本を訪れます（かつて、乗り継ぎのために成田空港のホテルに泊まったことがありますが数えないことにします）。日本で、自分と同じ立場の方々や学生たちとともに活動できることを、ものすごく楽しみにしています。ワークショップで探求していきたいと望むのは、ドラマを学ぶ者として、または教える者として、必要なドラマの材料をどのように決め、どのように使うのかです。ただのアイディアだけではドラマとは言えません。ドラマは三次元であり、ドラマが存在する「空間」を必要とします。ドラマを創造し演じることは、参加者に空間のダイナミクスと、自分たちと空間との関係性を身体的に、認識的に、精神的に認知することを求めます。その関係性を探求することは、それ自体が創造的で演劇的になりうることであり、これがまさに私が日本に行くのを前にして、いま実践的な活動の一つとして、準備していることです。ときにプロジェクトがドラマが行われる想像上の「場所」を示すことがありますが、私のワークショップの２番目の要素は、身体と言葉を使った演劇的なエクササイズを通して「場所」の感覚を築く方法を考えることです。私が探索したいと考えている３番目の材料が「登場人物」です。ドラマの「登場人物」はどのように考え出され、ふくらまされ、‘ 本物 ’らしく、作られているのでしょうか？　最後に、ドラマという名のもとで何かを行うには、そこに必ずある種の明らかな「行動」がなければなりません。

このようにドラマの要素を考えることは、本質的には、芸術形式の記号論をとるということです。しかし、芸術形式を、構成している材料に分解して、一つ一つ丁寧に系統的に教えるということは、せっかく一つにあわさった時に生まれたであろう、パワフルで心を打つ成果を失わせてしまうことになります。それゆえに私がやろうとしていることは、参加者をいざない、興奮させるようなワークショップの「レシピ」を作り上げる方法をお見せするということです。ご馳走が、味もおいしく栄養もあるように、ドラマ教育においても、その経験を、知性、感性、身体性の面でどのように栄養とするのか、注意深く考えていく必要があります。私が考えるドラマ教育の重要な成果は、参加者が、その演劇的な過程そのものに没頭するだけではなく、どのようにドラマが作られているのかという理解を発展させることです。さらに、参加者のリテラシー能力や、問題解決、意思決定などの能力を高める機会ともなるでしょう。私自身、ワークショップのファシリテーター、リーダーとして、そのような成果を生みだせるのかどうかを試してみたいと思っています。

このようなワークショップを下支えしているのが倫理的な課題です。偉大なる哲学

者ソクラテスが「全ての行動は意思次第である」と語りました。今いる空間に自分はどのように関係しているのか、ドラマが行われる場所をどのように作り出すのか、ドラマの登場人物をどのように生みだし、どのように演じるのか、そして自然な演技とはいかなるものなのか、といった問いに対して「考えること」が、参加者にとっても、また教える側にとっても、求められます。そのとき、私たちは一般的な倫理的なコードに沿って考えるわけですが、そこで、そのコードの一つ一つが、ドラマを通して私たちのことを映しだしていることに気づくと思います。それは時には不快だったり心地悪かったりするかもしれません。というよりも、思いがけないご馳走を不意に食べさせられるという感じだと思います。いずれにしても、その倫理面に気づき、きちんと認識する必要があるのです。よくない方向に導いたり、そそのかしたりすることがないようにするためにも、ドラマ教師がどのように倫理的な課題に取り組むのか、ということこそ議論していきたいと思います。

この夏、日本訪問を前にして、私はもっと考え、もっと準備すべきなのだということがわかっています。というのは、参加される皆さんを活気づけ、挑発し、そこに参加するのが楽しいワークショップにしたいと心しているからです。ドラマの材料を調理する私の方法を紹介し、皆さんと一緒に練りあげていくことが楽しみです。だって、日本料理はおいしい聞いていますから！

（あんでぃ・けんぷ／レディング大学上級講師）

翻訳／澤野理絵　文責／中山夏織

ドラマ・イン・エデュケーション2008

今年度はワークショップのみならず、授業に演劇をどのように取り込むのか（東京）、教員養成課程にドラマ教育の要素が導入しうるのかを議論するセミナー・ワークショップならびにラウンド・テーブル・ディスカッションを開催します。

○セミナー・ワークショップ「演劇の贈りもの―授業をいかす魔法のエッセンス」
ドラマ教育の理念と実践についての基調講演、「もったいない」をテーマにした演劇人によるモデル・ワークショップなど、演劇と教育の関係を新たな視点から議論し、考えます。

日時　2008年8月22日（金）　14:00 - 20:00
会場　オリンピック記念青少年総合センター
参加費　一般　4,000円　学生　2,000円　定員 25名
キーノートスピーチ　アンディ・ケンプ（レディング大学）
モデル・ワークショップ　寺本佳世（劇団青年劇場）／西海真理（劇団朋友）

○ラウンド・テーブル・ディスカッション
「ドラマ教育の可能性と展開―教育現場を変える！？　ドラマのチカラ」
なぜ教育現場にドラマが必要なのか、教員養成にドラマがいかに取り込まれうるのか、またいかに教員養成に演劇人がサポートできるのかを徹底議論します。

日時　2008年8月27日（水）　10:00 - 18:00
会場　大阪教育大学天王寺キャンパスミレニアムホール
参加費　一般　2,000円　学生　1,500円　定員　30名
スピーカー（予定）　アンディ・ケンプ（レディング大学）
田中龍三（大阪教育大学）／田中博之（大阪教育大学）
淀澤勝治（兵庫教育大学）／八木延佳（演劇プランナー）　他

お問合せ・お申込み：シアタープランニングネットワーク　tpn1@msb.biglobe.ne.jp

人材育成の倫理とマネジメント

中山　夏織

思い立って、人材育成について整理を試みている。昨年の「ドラマ教育を探る12章」にならって、「人材育成を探る12章」的なものになることを予定しているものの、調べながら執筆し、執筆しながら調べ、そして悩む日々が続いている。

一つの課題は、日本語だといい訳語がみつけだせないのだが、human development **in** the artsとhuman development **through** the artsの差異を整理することだ。つまりは、舞台技術分野はもとより除外しなければならないのだが、俳優・演出家、アートマネジメントなど芸術における職業化を求めるための人材育成と、芸術を道具として媒体として活用しての人材育成という二つの芸術教育・トレーニングの理念と実際を考えることである。

音楽などでの英才教育や、歌舞伎や能、狂言といった伝統芸能の家に生まれたりしないかぎり、基本的には、**through**として芸術に出会う。といっても、日本の習い事文化はこの両者のグレーゾーンのなかにその立ち位置が見いだせそうだが（たとえば、かつて娘たちに琴や三味線などを習わせたのは、女性が外で働くことが一般的ではなかった時代に、夫に先立たれた場合などを慮って、手に職をつけておきたいという親の思いであった）、ここではシンプルに、子どもたちが芸術を道具としてその健全育成をとげていく人材育成と、芸術でのキャリア・ディベロップメントとしての人材育成とに区分しておいたほうがいい。つまり、教育なのか、トレーニングなのか。

それでも、この**through**と**in**には重なりあう地点がある。職業人としての可能性を見いだすかもしれない次元で教育からトレーニングへと転換する地点である。ところが、ややこしいことに、この転換の地点は誰もに等しく、また同じ時期に訪れるものではない。その地点が早く訪れる人もいれば、とても遅い場合もある。最後の最後まで、訪れない人もいる。本人がどんなに望んでも得られない場合もある。それなりに努力すれば、勉強すればできるという職業ではなく、多分に天賦の才や美貌によりかかるものであるからだ。

指導者としては、カリキュラムに沿った指導ではなく、一人一人の発展と覚悟を見つめながら、その地点を見極め、丁寧にナビゲートしていくことになる。ときに待ち、ときに背中を押し、ときに急ぎすぎるのを止める。ときに、残酷なことであっても、適性と才能の不在を告げる。

しかし、日本という社会のなかで、非営利・営利の若干の差異はあるにせよ、ビジネスとして人材育成にかかわると、どうもこのあたりから悩ましくなる。いうまでもなく、芸術系の大学や教育機関が無数にあり－少子化のもと、大学全入時代、大学の生き残りをかけて、さらにその数は増加している。さらに民間の芸術団体に付属する養成所も膨大な数存在する。そこで学ぶ人材が求めるのは、「職業化」である。だが、現実には職業化への道筋はあまりにはかない。

経営のためにハードルを下げ、夢を安売りし、本来**through**から**in**に転換すべきではない人材をも転換させているのではないかという懸念は消えない。本来、職業化に適さない人材も、適する人材が学ぶ教育機関や団体を支える礎として不可欠であり、そこには「納税者のお金から少しばかり助成しましょう」という論理が、どこか正当化されてしまっている。

たとえば、「文化芸術振興基本法」は文化芸術にかかる教育と養成の必要性は謳うものの、そのプロビジョンの結果として養成されたアーティストやアートマネジャーの雇用には触れようとしない。文化の領域で、雇用を考えると、即、目の前が閉ざされてしまう。

指導にあたる一人の人間としては、職業化なしに、教育とトレーニング、つまり、人材育成の道筋が探れるのだろうかという問題にぶちあたる。ほとんど職業化しえない厳しい世界に若い人材を送りだすことに対する倫理的な自問である。自立できるように育てたので、学んだ後は、卒業した後は、自己責任といえばシンプルだが、卒業するまで、あまりにも過保護に育てられていることが少なくないために、頭を抱えてしまう。

パラドクスのマネジメント

何のための人材育成なのだろう？　指導者は何を求めて、何をガイドラインにして教え、鍛えようとするのだろうか。時代の変化を、子どもたちや若い世代の変貌をどのようにとらえ、それに即して、どのように指導内容や手法を変えていかなければならないのだろうか。バリー・サンダースは、「テクノロジーの革新によって、全く異なった種類の人間が生み出されつつある」と論じ、教育心理学者のジェーン・ハーリーは「変容する脳」として、時代のなかで変化する子どもたちの成長と教育に問題を投げかける。しかしながら、私たちはそれに対する方策をもっていないように感じてしまう。

throughであれ、**in**であれ、私たちが直面するのは、テクノロジーの革新のなかで育ってきた子どもたちであり、若い世代である。子どもに携帯電話を持たせるな、コンピューターゲームの時間を限れなどと論じられているが、現代社会において、子どもたちからテレビやコンピューターゲーム、携帯電話、その他メディアを遠ざけて育てるというのは容易なことではない。ときには、奪うことがかえって不健全な側面を持つことがある。悪い面は確かにあるものの、現代社会には不可欠なものであり、悪い面を飲み込みながら、その必要な面を享受しなければならない。これは一つの難しいパラドクスとして、私たちの前に横たわる。

パラドクスは、解決されなければならないものでもできるものもでもなく、「ただマネージされなければならない」ものだと思う。かといって、一人一人が自らマネージできるようにチカラを貸すのが、教育であり、家庭であり、コミュニティの役割というのも安直に過ぎる。なぜなら、助けなければならない大人世代が現在の子どもたちとは違う環境のなかで育ってきたからだ。ほんとうに現在の子どもたちの必要とするものを理解しているのだろうか。大人世代が「確固たるものを教える」と上から視線で構えるのではなく、わからないことをわからないのだと認め、子どもたちとともに探り、学んでいこうという姿勢が必要なのではないか。それが教える側に求められる「マネジメント」なのだと思う。

もちろん、教育指導要領や教科書が、学生たちに出会う前に作文され、整えられたシラバスの存在が、教師たるものを縛り、教育内容を固定化し、過去形のものにしてしまう。公平性の確保や、教育水準の標準化、あるいは教師と学生とのあいだの契約として、それらの存在の意味は否定するものではないが、だからこそ、その上に付加される「裁量」の部分を考え抜く重要性が大きくクローズアップされるように感じている。それもマネジメントである。

マネージするというのは、自己と他者、他者と他者の思いや利害と出会うなかで、交渉者として、ベターな解決法を探ることだと。勝ち負けではなく、どちらにとっても、公平でベターな解決を探るプロセスである。ところが、アーティストやアートマネジメントを志向する学生であっても、勝ち負けがすべての基準、あるいは、自らが自らの人生の「交渉者」であるという意識に欠くことが少なくない。これまでの人生のなかで慣れ親しんでしまったお客様的受身で、成果だけを享受したい狡さもある。また、与えられたフレームのなかに自分が、あるいは他者が100%そぐわなければ、すべてがうまくいかない、それでおしまいと考える性質をもっていることもある。自らの関与する事象に、他者との関係性において意思決定に参画し、相談し、調整しうるものもあるということに出会ってきていないのが現実なのだろう。極端な場合、すべて決めるのは自分、他者は関係ないという高圧的な姿勢も感じられてしまう。そのために自己完結してしまう。この傾向は、賢くて、いわゆる出来る学生に多く見られる。一方、自らが決定すべき事象の意思決定を他者にゆだね、何か不利益が見つかるとその他者を責めるという構図も少なからず見受けられます。その本質は世間を困らせるクレーマーと大差ない。

いうまでもなく、生きることは、自分の足で立ち、自分で歩くことだ[2]。人材育成の目的もそこにあるのだろう。自分で自分に対し責任をもって、マネージできなければならない。新たな問題にも創造的に立ち向かっていく。それが**through**であれ、**in**であれ、人材育成の根幹にあるべきだと思う。しかし、伸びようとする、背伸びしようとする子どもや学生たちを実年齢よりも幼い存在のままに留め置こうとする教師や親、教育機関の過保護と不適切なサービスに囲まれた状況にあっては、青少年たちは自立への道筋を見いだす必要を感じなくなるだろう。

ドラマ教育は**through**の権化のように扱われることもあれば（だから、アーティストは嫌う）、指導者によっては**in**としてだけ提供される。だが、私にとっては、「**through**と**in**を行き来しながら、芸術であるなしにかかわらず、職業人として、家庭人として、そして市民として社会に生きていくためのセルフ・マネジメントからはじまるマネジメント・トレーニングの一つ」である。人と社会の関係性を理解するコンテキストや空間性、これまで出会ったことのない諸課題に創造的に解決をもたらす想像力の育成、難しい意思決定、個人技よりもチームで成果をあげる協働性…すべては人間として生きるマネジメント・トレーニングである。、そこには芸術的感性、そして知性が不可欠である。それなしには演劇を活用する意味がなくなるだけでなく、人と社会のあり方も貧しいものに陥ってしまうからだ。このベースの上に、**in**のトレーニングが始まってほしいと願う。技術はあっても、倫理面に欠落があれば、芸術は社会との関係性を失ってしまう。

（なかやまかおり／アーツコンサルタント）

Network
ねっとわーく

「あうるすぽっと平成19年度ワークショップ事業報告書」発行

昨年9月に開場した「あうるすぽっと」(豊島区立舞台芸術交流センター)の初年度のエデュケーション活動の記録をまとめた事業報告書の頒布がはじまりました。(Ｂ５版、３４頁)
アートマネジメント研修生の視点から各事業が紹介されています。
ご希望の方は、送付先の住所を記入したＢ5版サイズ以上の封筒と切手200円分を下記までご送付ください。

〒170-0013　東京都豊島区東池袋4-5-2 ライズアリーナビル3F　あうるすぽっと　小沼知子　宛

編集後記

一般参加のプロジェクトではないので、前号で告知しなかったのですが、今年、私どもとしても少し野心的なプロジェクトに挑戦します。ややこしいのは、3つの団体(ＴＰＮ、三原キッズ、ロンドン大学)の三つ巴で開催するわけですが、実行委員会として別会計をたてているわけではないので、その区分や整理に頭を悩ましています。

英語で日本の芸術分野における助成制度やその考え方を説明するのは至難の業。日本語でも意味不明な側面が少なからずのこの分野、簡単には通じません。私個人にとってのいいトレーニングになりました。

さらに悩ましいのは、航空券代の高騰。実際には航空券本体はかえって安くなっているのですが、燃油サーチャージの高騰により、総額としては高くなっています。旅行社から見積もりを出してもらい、それで助成申請し、助成が確定して…というプロセスを経るのが私たちの仕事のあり方ですが、赤字補填の助成金制度のもとで、どうやって跳ね上がった分を賄うのかで苦しんだりもしました。幸い、ヘレン・ニコルソン博士一行が経由便、しかももものすごく早朝の便(ほとんど夜中!)にもかかわらず、快諾してくださったため、なんとか予算の範疇ぎりぎりを守ることが出来ました。ふう。石油価格の高騰はまだ続きそうです。ガソリン値上げで悲鳴をあげていらっしゃる方も多いかと思いますが、国際交流ビジネスもまた大打撃です。今後、どうなっていくのでしょうか。

準備のために厄介な作業を続けているものの、それでも楽しみなプロジェクトです。ロンドン大学の学生たち、日本の学生たち、そして三原キッズの子どもたちがどんな風にコミュニケートし、走り回り、限りない創造性を膨らませてくれるのでしょうか。

お人柄が伝わってくるようなアンディ先生のメッセージです。ＴＰＮの新アシスタント・コーディネーター澤野理絵が翻訳しました。応用ドラマ・プロジェクトの舟川絢子も同じく、アシスタント・コーディネーターとして、私どもの活動をサポートすることになりました(めげそうなとき、支えてね)。次代を担う人材に育ってくれることを願っています。

「人材育成」のブックレットがいつ発行できるのかは、まだ未定ですが、なんとか８月には…と願っています。あまり期待しないで、お待ちください。

「シアター＆ポリシー」も次号で、通巻５０号を迎えます。記念号だとか、特大号といったことは特に考えていませんが、応用ドラマ・プロジェクトの実況中継的な報告号になるのではないかと想像しております。限られた方々にしか届けられないプロジェクトだけに、それが重要だと考えています。(中山夏織)

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク（ＴＰＮ）

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンケージを目的としています。2000年12月6日、東京都よりＮＰＯ法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

特定非営利活動法人
シアタープランニングネットワーク
〒182-0003
東京都調布市若葉町1-33-43-202
TEL(03)5384-8715
FAX(03)5384-8715
tpn1@msb.biglobe.ne.jp
http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn

theatre & policy シアター＆ポリシー

ＴＰＮの基幹事業として、2000年6月から定期発行（隔月間・年6回）されています。定期購読をご希望の方は、ＴＰＮの準会員としてご参加下さい。年会費３千円（送料込み）を下記までご送金下さい。尚、送金の際は、ご住所・氏名・電話番号を忘れずにご記入くださいますようお願い申し上げます。
郵便振替口座　００１９０－０－１９１６６３　　加入者名 シアタープランニングネットワーク